

結成20周年
新たな大躍進
に向け出発!

月刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260-0017 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)
電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番
(公) 043 (222) 7207 番

2000.7.5 No. 5161

闘争団・家族の怒りの抗議で休会となった国労臨大

この必死の叫びを支えよう



闘争団・家族らの怒りに包囲された国労臨大(7月1日、社会文化館)

七月一日、一〇四七名の採用差別について「JRに法的責任がない」とを決定するために召集された国労臨時大会は、闘争団と家族、組合員の怒りの声で包まれ、本部提案を採択できないまま「休会」となった。

会場前を埋尽くした 闘争団・家族の怒りの声

闘争団と家族は、この日のために北海道・九州から大挙してかけつけ、早朝から会場前を埋め尽くし、「四党合意」受け入れを何としてもくいと止めようという一点のもとに団結した。「国労本部は私たちの全てを国労の旗と根こそぎ切り捨てようとしているのです。JRに責任がないことを認めることが家族にとって勇気や希望につながるなんて、本部の都合で私たちの人生を勝手に決めないで下さい。皆さんの力で悪の道に進む本部に正義の道を教えて下さい。私たちに臨時大会を食い止める大きな力を与えて下さい」(闘争団家族の発言)。

まち抗議の声に包まれて車から降りることもできずにそのまま立ち去ってしまった。会場に集まってくる代議員も、「四党合意賛成派は、闘争団と家族の説得行動の前に、会場に入れないまま立ち去ってしまう。

機動隊の弾圧に抗して!

開会の13時になっても、会場のシヤッターは固く降ろされたまま。通用口では、つめかけていた国労組合員らを排除するために機動隊が襲いかかり、ひとりや二人にも逮捕された。だが、それでも闘争団を先頭に結集した仲間たちは一丸となつて固いスクラムで機動隊の弾圧をはね返した。この臨大が自民党をはじめとした国の最高権力者の指示によって召集された大会だという本質があらわになつたのだ。

書記長集約に怒りの声

「上京闘争団ニュース」は、「JRに責任なし」を決定するという方針提起に対し、闘争団、組合員、家族の怒りの声によって騒然とした雰囲気につつまれ、しかも、一〇四七名と国労の未来を決するこれほど重要な議案を採決もとらず、拍手で採択するという、信じられない議事運営に対し、怒りの声は抑えがたく高まったと訴えている。

しかも13名の代議員や闘争団家族が発言し、まだ多くの代議員が発言を求めなかで議事を打ち切つて行われた書記長集約は、「私たちの人生をかつてに決めないで下さい!」という必死の叫びや、本部の姿勢に対する疑問、怒りの声にひと言の見解も述べずに、「JRに法的責任が

ないことを認めるということを集約としたい」というものであった。闘争団の仲間たちは、次のように提起している。「怒りの叫びが会場内に響き渡り、騒然とする中、無表情にマイクを握り、集約を続ける宮坂書記長。これが終われば闘争団切り捨てる四党合意を承認する決して多いとは言えない拍手まであとわずか。闘争団は組合から「解雇」される。……怒りは頂点に達した。演壇に駆け上がるとうする闘争団員、それを支える組合員たち。渾身の力を込めて壇上にたどり着き、それでも警備係から壇下に突き落とされ、それでもなおはい上がり、正面突破し、壇上上がり詰める闘争団員。……中央執行委員らはクモの子を散らすように演壇から逃げ去つた。演壇では何人かの闘争団がマイクを握りしめ、これまでの闘争への思いを胸に一緒に闘つていこうと訴えた」

何ということか!

これは、闘争団・家族らの止むに止まれぬ決起であった。ところが国労本部は、七月三日、「大会破壊の暴力行為に対し、非難すると共に憤りをもって抗議する」「政党関係者・政府関係者の皆さんに対し、衷心よりお詫びいたします」などという内容の「大会休会についての見解」を明らかにした。

なぜ一〇四七名を解雇した政府関係者にお詫びし、「闘いつづけよう」と必死に訴える闘争団を非難するのか。まさにこれは天地をひっくり返した見解だ。なぜこれほど多くの闘争団の仲間たちが遠く北海道・九州から結集、これほど強く抗議の声をあげるのか、それに真剣に応えようとする資格がないと言わざるを得ない。解雇された当事者がこれほど

までに強く反対しているものをなぜ強引におし通さなければならぬのか。そこには、何か別な意図があるのしか考えられない。

臨時大会での国労闘争団の主張と闘いは、一〇〇%正義あり、正当なものであるというにとどまらず、すべての労働者の権利と未来をかけたすばらしい決起だ。われわれは、一〇四七名の一人として、国労闘争団の必死の訴えを心から支持しともに闘う決意である。

動労千葉の要請も拒否

動労千葉はこの日、一〇四七名の当該組合として、全国から寄せられた「四党合意反対署名」を携えて、三役で国労本部に面会を求めたが、新井中執は理由も述べずにこれを拒否した。この署名には元国労委員長六本木敏さんも署名し、メッセージを寄せている。ところが国労本部は、会うことも受けとることも拒否した。

そればかりではない。国労中執が「四党合意」受け入れを決定した翌週

われわれは、宮坂書記長に「動労千葉も一〇四七名の当事者であり、どのような判断で受け入れを決めたのか、今後の展望をどのように考えているのか、三役で何うので率直な意見を聞かせていただきたい」と連絡したが、「日程がとれない」という理由だけで、それにも応じず、やむなく文書で要請を行ったがその後も連絡ひとつない状態だ。

国労闘争団をはじめ、一〇四七名のすべてを「カヤの外」置き、に自民党など権力者への嘆願だけを進めるやり方は、断じて労働組合の取るべき道ではない。「四党合意」が一〇四七名の切り捨てと、国労の自己崩壊への道であることは明らかだ。臨大での闘争団の仲間たちの必死の決起を支え、一〇四七名の解雇撤回のために全力で闘おう。

大失業と戦争の時代に通用する新しい世代の動労千葉を創りあげよう!